

## モスクのインテリアには ミヒラーブ ミンバル 聖龕と聖壇があるだけで椅子も何もない

### 『ザ・メッセージ』とモハメット

光 藤 俊 夫

イランの砂漠の中に人口五十万と百万の二つの近代都市を新しく計画する仕事で、暫らくテヘランに滞在したことがある。1976年2～4月の冬場のことだった。当時のイランは未だ王政が健在であり、しかも盛んに“近代化”が進められていた時期だが、だからと言って、その「近代化」に必ずしも国民すべてが賛成であった訳ではなく、たとえば婦女子の肌や髪の毛を隠すための外被（チャドール、アラビア語＝ヒジャーブ）は非近代的だとし、着用はなるべく止めるようにと言われていたのだが、それでは“コーラン”の教えに背くと、その黒い外被を身に着けたままの婦女子も多くいて、ときの王からの言葉にも耳を貸さない、いわば保守的な人たちもまだまだ大勢いた。にもかかわらずロックが流行り、若者たちの間では、ちょうどその頃から海外にも進出し出したソニーの“ウォークマン”が盛んに人気を呼んでいたりもした。もっとも、さまざまな「近代化」は十九世紀半ばから始まっていたのだが、1935年に国名をペルシャからイラン帝国と改名し、パフラヴィー朝の創設者となったレザー・シャー（在位1925～41）の治世となってから、いよいよそれは活発な動きを見せ始めた。私がテヘランで仕事をしていたとき、王はムハンマド・レザー（在位1941～79）となっていて、先帝の遺志をはっきりと受け継ぎ、西洋化に、また諸大国に準じた種々の分野での対外政策の見直しと躍進に、ますます大きな力を振っていた頃でもあった。そのため、今の政治は独断的かつ専制的だと陰で批判されることがあったし、確かに言論の自由を封じている趣もあったように思う。王の行く手を阻むものは容赦なく極刑に処せられるといった感じがあって、外国人である私たちも、迂闊にも国政を批判するようなことがあっては極めて面倒なことになる、といった雰囲気も

あった。国が経営に関係しているホテルを利用していたのだが、この都市に長く滞在している日本人に「ホテルのロビーなどで新聞を広げて耳をすましているような人には気をつけるように。王の定めた制度に文句を言う輩に目を配っている監視人が、うようよいますからね。」と忠告されたこともある。とはいえ私はひとり旅、しかもペルシャ語などももちろん話せず、第一話す相手などいないのだから、どうってこともなかったのだが。それにしても、毎日欠かさずに国王と王妃の写真が第一面に出ているここの新聞には辟易しながら、これこうした独裁的と見た国家のある種の“手”なのだろうと勘ぐっていたものだ。

ところでテヘランはその頃「中近東のパリ」と言われていた。確かに、入り用なものは何でもあった、と言えば「何でもあった」し、生活や仕事に特別不自由なことはなかった。ただし正直に言うと、食べ物はまずかった。「お酒は飲めない国」と聞いていたそのとおり、もちろん居酒屋などはなく、街や通りの屋台で飲めるでもなしなのだが、私たち「外国人」はホテルで嗜むことはできた。ロシア（当時はソ連）が近いせいでもないだろうが、私はもっぱらウォッカを愛飲した。それにあの“ペルセポリス”があるので有名な、シラーズで獲れるワインは、ムスリム（イスラム教徒）でもほどほどにやっているらしい。多分、外国人向けのためであろう、ホテルの地階に設けられていた、ベリーダンスショー付きのナイトクラブもどきの宴会場を利用した際に、そんな気配が窺えた。「食べ物はまずかった」とは言ったが、すぐ近くのカスピ海で獲れるキャビアは絶品だった（ただしムスリムはその教えに従い、親のチョウザメ同様食用禁忌）。もっとも、これはおよそフランス料理店でしか味わえない。しかも日本の“ふぐ”と似ていて、

これに当たると即「死」なのだそうで、キャビアを扱う店はしかるべきライセンスが必要、どこでも食せるというわけではない。でも運がよければ、深皿に山盛りのそれを、まるでカレーライスを食べるときに使用するようなスプーンでもりもり食べることが出来、愉快的なことこの上ない。そんなときはさすが「中近東のパリ」と思える。同じ地域でも、お隣はイラクの首都バグダッドとは大違いだった。

テヘランのあだ名はもう一つあった。「偉大なる駐車場」というのだ。際限なく石油が噴出する国だ。どこを向いても、とにかくクルマ、クルマ、クルマ。その上ドライバーはみんな荒っぽい連中ばかりで、ときに右側通行だか左側通行だか判らない走り方をしていたりする。それほどにクルマの往来も渋滞もひどい。そのくせタクシーは乗合で、道で行き先を大声で叫んでドライバーに気を引かせ、その上でよければ、同じ方向に行くなら、知らない人と“相乗り”ということになる。それと呆れたことに、大方の道に信号がない。したがって事故も多い。たまさか外に出ると、大通りでも、たとえ小道であっても、道を渡るのはまさに「命がけ」だ。あるとき、慣れた土地の人と思えるチャドールのおばさまの後にしがみつこうようにしてくっついて渡ったら、チャドールの奥の鋭い、一だけれども美しい大きな眼でギョロリと睨まれてしまった。そう、女性の傍に近寄り過ぎたり、触れたりなどするのは、この国では禁忌なのだ。また大通りには歩道との間に、春が来て、北のアルボルズ山脈からの雪溶け水を街に流し入れるためにしつらえた幅広の側溝があるのだが、歩行者に構わず突進してくるクルマを避けようとして何度も落ちたものだ。そこで水量が多いところだと、腰までずぶ濡れとなるのだが、ここは海拔一千二百メートルの高原、そして極端な乾燥地帯だ。ものの2～3分も歩いていれば、ズボンも靴も乾いてしまう。そう言えば、ここへ来た当初のころ、唇の皮がボロボロとはがれてしまい、何かの食べ物にでも当たったのかと嫌な思いをしたものだが、これもこの気候に慣れていなかったせいだった。ま、結局はじきに慣れ、すっかり治ってしまったが。以来、仕事場で飽きるほど始終出される“チャイ（お茶）”を必ずいただき、リップクリームを欠かさず携帯しておくことにした。

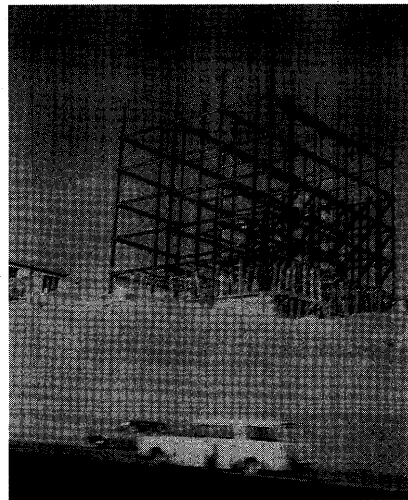
クルマで思い出したのでついでに言うと、当時は飛行機も北回りと言うのはなくて、ヨーロッパへ行くのにもみんな南回りで、台北やマニラ、香港にバンコク、シンガポー

ル、カルカッタなどなど、随分いろんな国の都市に止まり、渡って行ったもので、それでヨーロッパまで24時間もかかったのだが、私がイランに飛んだとき、その途中のインド洋上でアナウンスがあった。「テヘラン空港は現在路面が凍結していて着陸は不可能、よってクウェートに一時不着するが、テヘラン経由でクウェート行きの方は、預かった荷物はテヘラン止まりになるのを了承の上、降りてもよい」という。そして、今日で言えば“タリバン”紛いの外被をはおった怪しげな数人が銃を持ってどやどやと進入してきたのには皆びっくり仰天、思わず私も、荷物などどうでも、ここで降ろしてもらおうかと考えた。でも実は「銃」と見たのは木の枝でできた箒であり、ここで止まっている間に機内の清掃を、というのでやってきた空港の従業員だった。それにしても目的地でもないこんなところで、しかも機内からは一歩も外には出られずに2時間、というのはしんどいものである。まさか「砂漠の国」に雪など降るとは夢にも思っていなかったし、いわんや道路が凍結するなど想像すらしていなかったのだから。果たして、「荷物などどうでも。」とばかりに、そこで降りてしまった勇敢(?)な客たちがいなくなると、今度は「いまだテヘラン空港からの着陸許可が出ていませんので、このままとどまっているお客様には、恐れ入りますがフランクフルトまでご同行ください。よろしく。」と相なった。本日はやむなくドイツまで行き、明朝の西回りのPAN-AMで再びテヘランにトライしましょう、というわけだ。おかげで、ウィーンの建築家ヨセフ・ホフマンや、画家のグスタフ・クリムトなどと一緒に、ウィーンゼツェッションの創立者の一人であるヨセフ・マリア・オルブリッヒが、ときのヘッセン大公に招かれ、芸術家村建設(1901～08)に参画したその場所ダウムシュタットの瀟洒なホテルで、当地の地酒と言える白ワインを愛でながら、思いがけぬ一夜を過ごすことができたのだった。そして、ここはフランクフルトなのだから“ソーセージ”だとばかりに、翌朝のホテルのコンチネンタルの朝食はほどほどにして、PAN-AMのクルーに教えてもらった空港での「ここのは美味しい」と評判のテイクアウトのお店(店名は失念)のそれを頼張りながら、機上の人となったのだった。でも、まだ空港閉鎖は解かれず、あやうく今度はインドのニューデリーまで連れて行かれそうになったのだが、パイロットもさすがに嫌気がさしたのだろうか、「ええい！」とばかりに凍結した滑

走路に遮二無二強行着陸、飛行機は右に左にと激しくスリッピンしながら、やっとテヘランにたどり着いたのだった。

さて、私の仕事場となるアトリエには、テヘラン大学建築学科教授のサジェスションを受けてのアルバイト学生が七人、内一人は例のチャドールを着けていない女性だったが、私のスタッフとして待機してくれていた。その中ではリーダー格のアルメニア人だけが英語を話すことができたが、他は皆ペルシャ語しか話せない。だから私の下手くそな英語も、実際に図面を引いてみせるとか、手振り身振りでよく、そのアルメニア人だけには辛うじて通じはしたものの、これでは決められた日時に、A1×2の大きさの製図用紙を、少なくともパースペクティブ込みで30枚程度仕上げなくてはならないこの任務が無事に果たせるかどうか、いささか心配になってきた。そして、派遣の条件として「言葉はどうにでもなる。むしろ世間には秘密に属する内容のものだから、口の軽い人間は困る」といった意味合いをどう解釈すればよかったのか、いささかの戸惑いがあった。王様の指示による都市計画ではあっても、今のところ、プレリミナルの、そのまたプレリミナルのと言っていい程度の図面を引いて「絵」になっていれば、それでとりあえずはヨロシイということだから、ま、たとえ一人でも時間さえあれば、仕上げられなくはない。が、可及的速やかに、という約束だ。下手をすると首をちょん切られかねない。

ところでイランの面積は、およそ百六十五万平方キロ、日本の約4～5倍なのだが、その大半は山と砂漠と荒地、四分の一くらいが平地というのだから、人が住めるのはごく限られた狭い範囲でしかない。そのくせ、北の方は大陸性気候で寒暑の差は激しく、南の方は地中海性気候で酷暑多湿ときたものだから、建築やインテリアにしても、北では水気を、南では風、つまりは通気をといった工夫が、それぞれ仕分けられていたように思う。しかしとにかく「砂漠の国」だ。北とか南にかかわらず、「水」の確保が一番大切な生活上の要諦である。その取得先は地下水によるのだが、ここでは地下水の掘削に「カナート」と呼ばれる術、すなわち、高いところから何メートルかおきに穴を穿って掘り当てた地下水を地下でつなぎながら、徐々に低いところへと導いていき、やがてその水が顔を出したところが都市や街になる、といった仕組みを取っていて、そのためか、この国の都市や街は坂道の途中に設けられているような按



イランに地震がないわけではないのに、鉄骨がやけに軽くて細いのが、日本人の私たちには大いに気にかかるところだ。これはローカルな業者による建設中の建物だ。  
(筆者撮影)

配なのだ。もちろん、テヘランもそのような坂道の途中にある都市だといえた。そして絶えず、細かい砂が舞っていた。どう窓を締め切っておいても、翌日、製図版の上にはうっすらと、指で字がなぞれるほどの乾いた砂が積もっているのだった。なので朝のはじまりは、それをはたき落とすのにちょっとした手間がかかったものである。なお、ムスリムたちは、その“派”によっていろいろと異なるようだが、日に三～五回はメッカの方角に向けて礼拝することは同じであって、礼拝の時を知らせる“アザーン”の声がミナレット（光塔）から聞こえると、何をやっていてもその場にひれ伏し「アラーの神よ!」となるのだから、その間は声をかけるのも遠慮しなければならず、まったく仕事にならない。その代わり、一日の最初の祈りは未明と書いてもいいくらいの早朝のせい、わがアトリエのスタッフたちに遅刻がない。そして午前中の仕事はよくできたが、午後にもなると、とんとハカが行かず、早引きも多かった。この国の人たちの“癖”みたいなものだったか。「癖みたいなもの」と言えば、もう一つどうしようもないのがあった。何を計画し、設計するのに、いろいろな資料が必要だ。例のテヘラン大学の教授に相談すると、「それはある」。そして後にはいつも「ツーモロウモーニング」という言葉とセットで応えが返ってくるのだが、「明日の朝」にそれが手渡されることはほとんどなかった。よって、この壮大

なる(?) 仕事も終え、いよいよ帰国となったその日まで、ついに見る事がかなわなかった資料が幾つもあった。その上、ここは「アラビアン・ナイト」で有名なペルシャだ。映画『バグダッドの盗賊』(ラウル・ウォルシュ監督 1924 / ルードヴィヒ・ベルガー監督 1940 / クライブ・ドナー監督 1978) や『アリババと四十人の盗賊』(アーサー・ルービン監督 1944) などでの、ちょっとばかり恐ろしいベドウィン族などに会いはしないか、また「開けゴマ」ではないが、ひょっとして不思議なことに巻き込まれはしないかなど心配もしたのだが、なんとそんな「心配」が本当となり、幾つにも重なりながらあったのだった。

が、それはともかくとして、一体マホメットという人はどうしてこの世に、何のために出現したのか、またイスラム教とは何ぞや、そしてムスリムとは? また、モスクはどうして出来たのか、そこで「お祈りをしよう」と呼びかけるのに、鐘などではなく、人の声で唱える“アザーン”となったのはなぜか? また、旧約聖書に見る「眼には眼を」、「歯には歯を」の教えが、いかにしてイスラムのしきたりに準じながら“ジハード(聖戦)”として確立していったのか、そして“ヒジュラ(聖遷)暦”は何からの出自なのか? メッカのカーバ神殿とは何なのだろう?

そのすべてが理解できる訳ではないものの、映画『ザ・メッセージ』(ムスタファ・アッカド監督 1976) が要領よく教えてくれていると思う。マホメット(アラビア語=ムハンマド 571~632) が主役でありながら、彼の姿は一切現されることのない、まったくもって「珍しい」、しかもれっきとした「アメリカ」映画なのだから、今日から見れば極めて貴重な逸品といえよう。「偶像礼拝」を禁じている証を映画の中でも守っているというわけだ。だからマホメットに話しかける人は、観客に向いている。つまりは、カメラレンズがマホメットその者であることになっている。1979年、パリからホメイニ師が戻り革命が起きたとき、私はもうテヘランを離れていたが、以来この国は中世に還ったようだ。これは何も、王政が健在だった頃の方がよかったなどと言っているのではないし、また今のイランがいいと言っているのでもない。

絶え間なく動揺し、その表情を幾重にも変化させている美しい、そして延々と連なる砂丘に、砂塵を上げて真っ白の外被(ベール)にすっぽりと身を覆った伝令たちが馬を飛ばして四方八方に駆けて行き、これから先のこの物語の

展開に大きな期待を持たせてくれる、極めてスリリングなシーンを冒頭に飾っての映画『ザ・メッセージ』は、本来の主役であるマホメットが、まったく顔も姿も見せないのは、イスラム教の「偶像礼拝」を禁じている、その教えを守ってのこととは先に述べたとおりだが、その代わりと言えるかどうか、とにかくマホメット率いるところのムスリムたちを統率して活躍する、マホメットの伯父なるハムザ(アンソニー・クイン) がいて、いわばこの物語の狂言回しの役をこなす。先の伝令たちは、サウジアラビアのメッカの商人の子として生まれたマホメットだが、ヒラー山の洞窟で修行中、天使ガブリエルを通じて神アラーの啓示を受け、「アラーの他に神なし、アラーは万能で万物の創造主なり。」と悟りを開き、このことを世界中の王たちに知らせようとしての計らいなのだった。エジプトのアレキサンドリアに、またイスラエル、そしてビザンチン、そしてペルシャへと、それぞれの王たちに「アラーは偉大なり」、「神は唯一アラーのみ」と伝え、皆今日までの多神教を捨て、一神教なるイスラム教の信者となるべしと。もちろんこの国の王とて、すぐさまそれに応じるはずがない。第一マホメットが生まれ育ったメッカでさえ、マホメットの悟りについてなど、だれも信じていなかったのだから。

当時のメッカは、今日とも変わらない、このあたりの交易の拠点であり、いわば商人貴族の街だが、ここには各自の商売の繁栄を願っての、なんと三百六十ものいろいろな素材で出来た種々の形の「神様」が「偶像」として“カーバ神殿”に祀られていて、それへの巡礼行でやってくる各地からの信者たちで賑わい、したがって交易もうまく行き、商売も順調に成り立っているということならば、そのことを支配している領主や首長らが、そうしたたとえ“木”で、あるいは“石”でできた「偶像」でも、「そんなのは神ではない」、「神は唯一アラーのみ」とする一神教など信じられるものか、なのであった。それでマホメットはさまざまな迫害を受けることとなり、遂にはメッカからも追い出され、北のヤスリブ(後のメディナ)にハムザはじめ何人かの信者たちと共に、一旦逃れることになるのだが、このときのことを“ヒジュラ(聖遷)”と呼び、そしてこの年の西暦622年を“ヒジュラ暦(イスラム暦)”元年としている。宗教行事には当然だが、そうでなくてもこの暦を使用している場合があるので、慣れないうちは、まごつかされることもしばしばだ。だから西暦に直す必要のあるときは、

622年を足さなければならない。革命後も多分このことは変わっていないと思う。革命前の私の経験だが、帰国後に“ヒジュラ暦”の日付の入った領収書の処理で苦労した記憶がある。「領収書」といえば金額の記載があるのは当然なのだが、私がこの国にきて真っ先に覚えなければならなかったのは、数字だった。今日私たちが使用している数字は“アラビア数字”と呼ばれる。ならば、そのままで今更「覚える」必要もないわけだが、それがちょっとばかり違うのだ。何となく“ペルシャ調”というのか、1も2も横向きにかかわれているような具合のものだ。バザールに出ている品物のプライスカードも、クルマのナンバーもそんな「具合」だから、「0」が「・」だったりするのにも、四の五のと言っていない。それにしても5がハート型になっているのが何とも不思議なことだった。「0」は本当は「○」だ。それを「・」などにしている例が多いのは、それで客の方にはゴミのように見えさせ、一桁も「安いぞ」と思わせる作戦のようだ。そう、勘定のときも、落語の「二八そば」のやり方で、しばしば「今何時だ」が、言葉のやり取りの中に入ってくるから、用心しなくてはならない。とにかく“マジシャン”の多い国だ。バザールでも「アンティーク、アンティーク」としきりにその古くて価値のあるものとの呼び声を盛んかけられるのだが、何のこともない。店の裏に回って見れば、ただ今出来上がったばかりの、真新しい陶器であれ金属物であれ、一所懸命に汚しながら古めかしく見せようと汗している、それ専門の職人さんがいたりするのだ。まさに「開けゴマ」の世界は「騙される」のを楽しむくらいの度胸が必要だ。

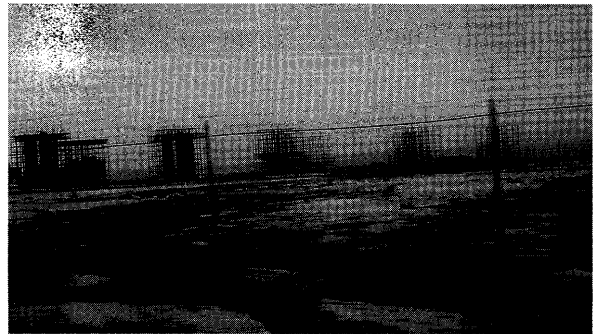
話を戻そう。ひとまずマホメットは、メディナに身を潜める。そこでマホメットの預言（神からお預かりした約束事）を信じた土地の有力者の一人が「住まいとして我が家を提供しよう」と申し入れる。しかしマホメットはそれを断り、面白いことに、乗ってきたラクダが脚を折り曲げとまったところに小屋を建て、そこを住まい兼集会所にしようとするのだが、その史実として伝えられているとおりの情景が展開される。そしてラクダが止まった広場があり、モハメットの指揮の下、ハムザを先頭に干乾しレンガを積み上げ、塀を作り、樹を刻み、枝を払い、柱や梁や母屋などを信者たちと一緒に建て、組み、敷きそろえ、樹々の葉っぱを貰ってその様子を整えるのだが、それがいわば一番最初のモスクの登場でもある。ハムザが言う。「お祈りに人

を集めるのはどんな方法がいいだろう?。「鐘をつきますか」「それとも太鼓にしますか」。そこで再びハムザが口にする。「どちらも騒がしすぎる。」と。すると一人の黒人の信者が立ち上がり、「アラーは偉大なり、アラーのほかに神はなし、マホメットはアラーの使徒なり、いざや礼拝に来たれ、いざやアラーのために来たれ。」と朗々と呼びかけてみせる。そして「人の声が一番いい」と、皆が賛成することで、礼拝のときを知らせる方法が決められる。これを、前述のように“アザーン”と呼ぶのだった。そう、それは私が仕事をしていたアトリエにも、ほとんど常時と聞いていくくらいに聞こえていたものだ。そして私は不遜にもこれを、その頃巷で流行っていた、女の子が好きそうな、しかしやっぱりこの国独特の節回しの歌謡曲と一緒に“コーラン節”と名づけていたのだが、これも慣れてしまうと心地よく聞くことができ、いつもそんなのを例のウォークマンで鳴らしつづけていた我がスタッフのたった一人の女性が用事で外出していたりするとそれが聞こえず、何となく寂しい感じがしたものだ。

そんな“コーラン節”と同じように絶えず耳にしたムスリムたちの言葉に「エン・シャーラー」（正確にはどのように唱えていたのか判然としないが、私にはそう聞こえ、〔アラーの思召すまに〕という意味だそうな。）というのがある。先にも書いたテヘラン大学教授の「ツーモロウモーニング」、つまりはメキシコでの「アスタ・マニアーナ（明日は明日の風が吹く、くらいの意味）」と同義語だと思えばいい。テヘランに着任してすぐ、例のアルメニア人が「一応敷地となるとところを見に行こう」という。五十万都市も百万都市も、「一応」も何も砂漠というか、“土漠”といったほうがふさわしい荒野のど真中だ。そんなところを見に行く必要などあろうとは思えないが、その日も未だ月も出ているような早朝、コワモテの兵士らしき一人のムスリムが運転する厳めしいジープが私の泊まるホテルにやってきた。例のアルメニア人は？と聞けば「彼は来ない」と言う。しかもこの“コワモテ”はペルシャ語しか話せないときた。まるでどこかに拉致されるような、いかにも心細い「月の砂漠」行きとなったのだった。そして所々に雪溜まりのある、そんな「砂漠」を珍しい風景と愛でながらも、「これからこの雪の断崖を降りるから、しっかりと椅子にしがみついていてくれ。」と言われ、「大丈夫か？」と聞くと「エン・シャーラー」。「こんなところに狼の足跡がある。」と教えら

れ、「もう引き返したほうがいいんじゃない？」と問うても「エン・シャーラー」。そしてジープの速度はさらに上がって、狼の足跡を追うがごとき勢いを示したりもする。こちらが怖がれば怖がるほどケッケツと髭にまで笑みを見せているような意地悪な兵士だった。

そう、兵士といえば、私のアトリエの向かい側がちょうどイラン陸軍の兵舎で、お昼休みなどには兵士たちがよくサッカーで遊んでいた。ある日、散歩ついでに鉄柵ごしにそんな彼らを眺めていると、知らぬ間に剣付き鉄砲を肩からかけた一人の兵士がそっと忍び寄ってきて、そのとき持っていた私のカメラを顎で指し、「俺を撮ってくれ」というポーズをとる。たまたま新しく入れ替えておいたフィルムで2〜3枚撮ってやったのだが、すると向こうでサッカーをしていた兵士の何人かもワイワイとやって来て、「俺も、俺も」と競うように私のカメラの前でポーズするのだ。それで「送ってあげるからアドレスを。」と問いかけたときだった。その兵士の顔色が変わり、「送ってやることはない、そのカメラごとこちらに寄越せ。」と言う。サッカーの連中はそのときにはもう、元の広場に散らばっていたのだが、その兵士だけが執拗に私のカメラを狙う。「そんなことは出来ない。フィルムだけならあげてもいいよ。」と答える。断っておくが、何度も言うように私はペルシャ語どころか、英語だっていいかげんなものだ。したがってその兵士とのそれまでの会話は兵士がペルシャ語でまくし立て、私は下手な英語と日本語のちゃんぽん+身振り手振りよろしくなのだ。そしてその次に理解できたことは、兵士の手刀を首にあてがい、横に切って見せての身振りだった。加えて「おまえは今、国家機密の軍隊の様子をカメラに収めたのだ、それはこの国では死刑に値する行為だ」。つまり私を丁重に騙しての、スパイ容疑者発見の榮譽を得ようという訳だ。なんとバカバカしい。急いでフィルムを取り出し、鉄柵の腰の煉瓦塀の上に、なるべく兵士より離れたところに落ちるように置いた。当然兵士は、それを拾うためにかがむことになるだろう。退散するのはこのときだ。そして鉄柵を背にして向かい側の歩道へと逃げた。なにしろ相手は「剣付き鉄砲」を持っている。いつバシーンと来るか、あのときの背中の中のむずむずした気持ちは、今思い出しても「ムズムズ」以外にない。こんなとき、向こうの人なら「エン・シャーラー」と叫ぶのだろうが、私は異教徒だ。どんな神様とて「どうぞ思し召すまに」な



テヘラン郊外の雪の砂漠に建設中の集合アパート群。1970年代半ばは、イランもイラクも建設ラッシュだった。もちろん日本の建築家や建設業者も大いに協力していた。  
(筆者撮影)

ど言えたものではない。もっともペルシャ人は、あくまで私の受けた印象で言うのだが、女性は冷たく、男はいささか陰気でネクラな輩が多いように見受けられたが、もちろん皆がみんなそうではない。男に限るが、ときにけたたましく陽気で愉快な仕種で振舞う者もいないではない。ことにバザールの連中たちは「嘘つき」を併せながらも、そんな憎めない人が集まっているようだ。

さて、話はモハメットとイスラム教だ。メディアで人気を得るようになったモハメットに、メッカ側はなおも彼を亡き者にせんと追撃を重ね、茫漠として寒暑の差が夜昼とうつろいやすく過激な広い砂漠で（こんなところに、あの雪にも弱い新幹線を、例の2つの都市の間に通そうという計画があり、当時の国鉄の職員が派遣されもしていた）、メディア側も何度でも果敢に応戦する。このときの勝ち負けの条件に、どちらが先に水の求め易いオアシス近くに陣地を確保するかが決め手となる様子が描かれていて、はなはだ興味深かった。ここでもまた砂漠での戦いが如何に過酷で鮮烈であるかが、観ていて切なくなるような趣で展開され、勝敗をこもこもとしながら、メッカ側の女闘士ヒンド（イレネ・パパス）の指図でハムザが撃たれて死に、また何人ものムスリムたちがメッカ奪還のための犠牲となるのだが、遂にはメッカ側の要人たちにも多神教から「アラーの他に神なし」の一神教に帰依する者を続出させて、やがてかつての迫害への報復を果たしたモハメットは、メッカへの無血凱旋を成し遂げる。そしてカーバ神殿に乗り込み、あまたある「偶像」類を、その杖でバッタバッタとなぎ倒して（そ

ここで神殿の内部が窺えるところで、一種厳粛な興味を持たされるというものだが、ここでもマホメットは顔も姿も見せず、杖だけが観客の私たちの前で踊り、舞うだけだ。そして、イスラム教に改悛したメッカの市民たちと共にそれらを外に放り出して、カーバ神殿の上に懸け登った、例の黒人のムスリムが「アザーン」を唱え、皆で神殿の周りを「アラーは偉大なり」と祈りながら回るのだが、ここでは七回の逆時計回り（このことをタワーフと呼ぶ）をしており、今日の巡礼（ハッジ）時の儀式の原型として認識させられる。

ところでカーバ神殿は「黒の花崗岩で積まれた長方形の建物で、その四隅が東西南北にあたる。正面は東北部（筆者註：余計なことだが、家相で言えば鬼門にあたる）、その幅約十三メートル余、側面は約十二メートル、高さは十五メートルほど、その全面はキスクと呼ぶ黄金の刺繍で飾られた、黒の絹布でいつもおおわれている」（『啓示と実戦／イスラム』吉田光邦著 淡交社 1959／以下「」での引用は同書より）私は今日のこの神殿のインテリアを実見してはいない。映画にも今日の神殿の内部の描写はない。だが、昔はこの中に木や石や粘土でできた、いろいろな奇怪なかたちの「偶像」が少なくとも三百六十体も並んでいたのかと思うと、数の

上では京都三十三間堂の千手観音像にはかなわないものの、その怪奇な情景にはぞーっとしつつめくるめく。実は今日、カーバ神殿の「内部は何もない」。それはちょうどモスクのインテリアに、礼拝の方向を示すメッカに向いた聖龕（ミヒラーブ）と聖壇（ミンバル）以外には何もない、空っぽの空間と同じようにだ。キリスト教も一神教だと言えばそうも言える。イエスはあくまで神の使徒であり、神のお言葉をお預かりしている方であって、神その者ではない。ついでのことながら、ユダヤ教も「神は一なり」と言っている。そう、いずれの神にも名はない。アラーやヤハヴェと言うのは、英語で言うゴッドのことなのだ。

ちなみに、私があの図面も、この図面もと引き止められるままに二月余りもテヘランに滞在していたわりには、ペルシャ語もその文字も覚えられなかったし、こちらのトイレは日本式同様「しゃがみ式」で、ま、それはいいとしても、用便後に水で濡らした素手で局部を拭うといった風習には、馴染めもしなかったことを告白しておく。（ついぞ試すこともなかった。）そして図面と絵は出来上がったものの、例の砂漠の中の新都市は一つも実現せず、したがって「新幹線」もこの国には走らなかったのだった。



・ミヒラーブ

メッカの方向を示す聖龕。モスクがどのようなかたちのプランであろうと、ミヒラーブはメッカの方向（礼拝の方向）を指して設けられる。

・ミンバル

階段状の説教壇。ミヒラーブの傍に位置する。大理石製。陶器製の屋根の上に金箔製の球が乗る。

モスクのインテリア  
(筆者・画)

(みつふじ としお 本学名誉教授)